

うめきつつ、希望を抱きつつ

代務牧師 齋藤 篤

聖書 ローマの信徒への手紙8章18~25節

¹⁸現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないと思わしは思います。¹⁹被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。²⁰被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。²¹つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。²²被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。²³被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。²⁴わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。²⁵わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

日本聖書協会『聖書 新共同訳』

本日の週報をご覧になられた方は、教会のカレンダー、つまり「教会暦」に変化があったことにお気づきになられたかもしれません。本日の日曜日は「終末前々主日」と名付けられています。5月の終わりにペンテコステ、つまり聖霊が私たちのもとに降臨されたことを祝う祭りを祝ったことで、私たちが父なる神、子なるキリスト、そして聖霊という「三位一体の神」によって守られていることを意識することのできる期節というものを過ごすことができました。教会の歩みというものは、まさに三位一体の神によって、そして、現実的には聖霊なる神様の慰めと助けによって、なされていると言って間違いありませんし、それを私たちの信仰としているのです。

私たちが毎週の礼拝で信仰告白文としている「使徒信条」では、「我は聖霊を信ず」、つまり、聖霊なる神様を私たちは信じますと告白しています。そして、聖霊を信じるとはどういうことかについて、使徒信条は続けて、「聖なる公同の教会」を信じるとあります。つまり、教会がキリストのからだであり、私たちもまたその部分とされていることを信じるというのは、聖霊なる神のお働きというものを信じなければ、決して成り立つことは無いと言うのです。その教会で、私たちは同様にキリストの体とされている信仰の友との豊かな交わりがあり、その交わりのなかで、私たちはキリストとの深い交わりを通して、自分が抱えている罪が、キリストによって赦されることを信じると、私たちは告白することができるのです。

そして、キリストとともに、またキリストによって体とされている友たちとともに、与えられた人生の日々を生きていくというのは、今だけのことではない、地上における人生の終結に向かって歩む私たちが、将来においてもその交わりは、ただ平和のうちに永遠にわたって続いていくことを、私たちは「からだのよみがえり、永遠の命を信じます」と告白する。使徒信条とはそういう、私たちの希望を神に託して告白するという、まさに壮大な告白文であると言えるのです。

話は戻りますが、教会のカレンダーに「終末」を意識させる名前が付けられているというのは、とても大きな意味があるということなのです。私たちは、間違いなく終末に向かって歩むのです。命の終わりというものを、私たちは自分の力で止めることはできないのです。必ず私たちは「死」を迎えることになるのです。先週の日

曜日、私たちは「永眠者記念礼拝」をおさげいたしました。礼拝堂に飾られた、実に多くの先達たちとともに、神によって守られていることを実感する礼拝だったかと思います。そして、礼拝後には、教会墓所で礼拝、そして昆野恭子さんの納骨式を執り行いました。私たちは、このような礼拝を通して、人間の死というものを想起こそすわけですが、しかし、その死というものは、私たちにどのような印象を起こさせるのでしょうか。私たちの死は、死のままで終わることは決してない。死の先には、永遠の命というものが待ち受けている。少なくとも、私たちの神は両手をいっぱい広げて、私たちを迎え入れてくださる。そこにこそ「神の国の幸い」というものがあるということ、私たちは永眠者記念礼拝、そして墓前礼拝を通して味わう機会をいただいているのです。

ですから、終末というのは、終わることへの悲しみであるとか寂しさを思わずにはいられないという現実を抱えながらも、同時に、将来に向かう希望のなかで、私たちひとりひとりが人生の日々を歩むことができるのだということをも、私たちに気付かせる出来事なのです。そう考えると、終末というのは決して恐れを呼び起こすものではなく、むしろ、神の世界が完成するという喜びの出来事なのかもしれません。

本日の聖書箇所として挙げられたのは、神の国が訪れるのを心待ちにしていた、使徒パウロによるローマに住む信仰者への手紙です。この世の現実で、キリストによる愛や救いを伝えるという生活の中で、多くの苦しみや痛み、葛藤というものを抱えながら、パウロ自身がいろいろ思い悩みながら、本当に大切なことを、愛する仲間々に伝えようとした、まさにパウロの思いが凝縮されたような手紙なのですが、今日の聖書箇所はその中でも、真骨頂とも言える、パウロによる言葉と言えるでしょう。

そのなかで、パウロは「私たち、神によってつくられた被造物は皆、虚無のなかにあるのだ」ということを、ためらうことなく告白しています。そのことが20節の冒頭で綴られています。虚無。何もない。何も残らない。どんなに名声を積んだとしても、どんなに財産を残したとしても、私たちは死んだらそれをもって自分自身を守ることはできないのです。いつかは忘れ去られてしまう。まさに虚無という言葉が、否応もなく私たちの現実突き刺さってくるのだと、パウロは自分自身の姿を踏まえながら手紙を綴っているのです。パウロ自身、モーセ律法における最高の教育を受け、社会的にはローマ市民権という特権を持つことのできた人物でした。しかし、キリストを前にしては、今やキリストとともに生きる者となった今、それらが自分の命を支える絶対的なものとはなり得ない。むしろ、そんなものが役に立たず、虚無のなかを生きなければならないような場面に遭遇したことなど、幾たびもあったわけです。

しかし、パウロは、そのような虚無のなかに自分自身を省みながらも、「希望もあるのだ」と告白しているのです。何もなくなったら、夢も希望もないという話ではないのです。なにもかも取り去られて、失われたとしても、だからこそ、私には希望があると、パウロは人々に書き綴っているのです。なぜならば、私たち一人ひとりとともに歩んでくださるイエス・キリストがおられるから。パウロはただ、そのことを自分に無くてならないものとして告白したのです。先ほど、私たち人間は虚無のなかを歩んでいると申しました。しかし、何もかも取り去られたとしても、たったひとつ、私たちのうちから無くならないものがある。それが、救い主イエス・キリストその御方であるということです。パウロは、だからこそこのたったひとつのことに、自分のすべてを託した。希望を感じて、ここに自分の希望を集中させたのでした。自分自身の力ではどうにもならないことを、キリストがおられるならば、乗り越えていける。神が招いてくださるあの向こう岸へ、渡ることができるのだと。

そのことを、パウロは「うめきながら待ち望む」という言葉で表現しています。23節の終わりに書かれている言葉ですが、一見すると、この言葉はとても奇妙な印象を私たちに与えるものであると言えるでしょう。うめくことと希望を抱くことは、正反対の意味をもたらすものだからです。苦しいからうめくのです。前へ進めないから、私たちはうめきの声を発するのです。うめかない人など誰もいないのです。私たちがうめくときに、そこに希望は果たしてあるのでしょうか。この世の中に向けてアンケートを行ったら、うめきと希望がセットになることなどありえないという回答が続々と寄せられることでしょう。

しかし、世の中がどんなに馬鹿馬鹿しいと一蹴したとしても、私たちは、この世の現実にうめきながらも、しかし、キリストがおられるからこそ、同時に希望を抱くことができるのです。ただうめくだけではなく、うめくことを無理やり押し殺して、カラ元気を装いながら希望、希望と叫ぶわけでもありません。私たちは自分自身の痛み苦しみを、正直と吐き出してしまっても良いのです。うめくことが決して罪などではない、不信仰の表れでもない。誰でもうめくという現実に向き合うからこそ、キリストがそんな私にも救いを与えてくださったのだと、希望を抱いて、今日の一步、明日の一步を踏み出すことができるというのです。

祈り

私たちのうめきのただなかに、救い主イエスを惜しみなく与えてくださった神様、

私たちのうめきのなかにキリストが立たれることは、虚無が虚無のなかでは終わらないことへの、私たちの希望そのものです。

どうか、私たちに将来への希望をお与えください。そのなかで、私たちがやがて迎えることとなる終末が、未恐ろしいものでは決してなく、夢と希望に満ちあふれた、神の国のもたらす幸いと、私たちのうちに受け止めさせていただきますように、お願いいたします。

永遠の王なる、イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。